伝統芸能の神髄を後世につなぎ 時代に合わせて柔軟に広げていく

川根本町の伝統芸能。私たちとって後世につないでいきたい大切な財産です。しかし、人口の減少とともにその継承は難しくなっています。伝統芸能を継承するために、２０２１年度に開催した「伝統文化交流会」。その講師を務めた清沢神楽保存会の北沢勝麿さんに話を聞きました。

「ユネスコ登録は大きなきっかけ。この機を逃さないで積極的に周知してほしい」

神社の合併に見い出す継承の未来

伝統芸能の継承は、少子高齢化が進む私たちの地区には大変困難なことでした。清沢の神楽は、今から数十年前まで、地区ごと異なった神楽を伝承していましたが、その保存・継承が難しくなり、昭和52年に８つの神社で合同の保存会を設立し現在の形になりました。合併当時、反発もありましたが、どの神社も同じ課題を抱えていたので、徐々に互いに理解を深め、神楽を現在までつなげることができました。

芸能の基礎を知り次世代へ

川根本町は、神楽を伝承している地区がそれぞれ大きく、神楽の特性も異なるので、簡単に合併することはできないと思います。ですが、神楽の継承に他地区や町外者、移住者などの力を借りることは間違ってはいません。ただ、誰でも良いかというわけではなく、芸能の歴史的背景や神髄を積極的に理解し、関わりたい意欲がある人と活動することが大切です。

私たちは、そのような会員とともに週２回の練習を年間を通して行っています。練習では振り付けだけでなく、神具や舞の持つ意味を根本から身に付けます。そうすることで、小学校などへの出前授業の際にも、楽しみながらかつ、神楽の根本的な意味を教えることができるようになります。

時代に合わせた柔軟性も必要

一方で、イベントなどで披露する神楽は神事とは別物として考える柔軟さも重要です。主催者などの要望に合わせて、演目を短縮するなどしていますが、それは本来の神楽ではなくなります。しかし、結果的に清沢の神楽が多くの人の目に触れる機会が増え、新しい伝承者を生むきっかけになります。神事とエンターテインメントを分けて捉え、裾野を広げる挑戦は必要なことです。

清沢の神楽は、今日までに一部失われた演目がありました。そんな時、神楽の流れを同じくする川根本町の梅津神楽や田代神楽に学び、復活させた過去があります。仮にそれらの芸能が廃れる危機に陥った時、ぜひ私たちを頼ってほしい。伝統芸能を広く静岡県の財産と考え、共に保存・継承に力を注げればと考えています。

interview 伝統芸能を担い、次代につなげる人たち

▲清沢神楽大祭（2019年11月3日～4日）
提供：静岡市

【 清沢の神楽 】

◀ 清沢の神楽は、安倍川・大井川・瀬戸川流域に広く分布する神楽のひとつ。昭和５２年に清沢神楽保存会が結成されてからは、地区全体で神楽の保存に努めており、保存会のメンバーが各集落の祭礼で神楽を奉納している。

毎年、１０月中旬から下旬にかけて清沢地区の各氏神社で執り行われている。

清沢神楽保存会
会長 北沢 勝麿さん

田代神楽

【徳山の盆踊・鹿ん舞】

徳山神楽

梅津神楽

【徳山の盆踊・狂言】

徳山神楽

梅津神楽

【徳山の盆踊・ヒーヤイ】

伝統文化の継承について学ぶための「伝統文化交流会」では北沢会長が話すように、芸能の継承のためには、先人の教えは確実に受け継ぎつつ、現代に合わせた柔軟な考えを持つことが必要になります。徳山古典芸能保存会は、学生など外部の力を借りながら新しい挑戦を始めています。

ここで澤本等さんの言葉が思い出されます。「伝統芸能と祭りを地域で盛り上げたい。祭りは人と人の絆そのもの。芸能の衰退は地域のつながりの衰退。そのつながりをもう一度、つなぎたい」。

各地域に、今も伝統芸能が残っているのは、これまでに携わった人たちが、自分たちが生きてきた地域の伝統に誇りを持ち、その歴史を未来につなぎたいと思ったからこそです。過去から現代まで受け継がれた思いや大切に守ってきたものを、これからは地域や子どもたち、若い世代などの皆さんにも触れてもらいたい。そう願う人たちの思いに触れ、自分のこととして考えることが、伝統芸能を継承・保存していくことにつながるのではないでしょうか。